

キャリア教育とアクティブラーニング

上伊那教育会 キャリア教育委員会
赤穂中学校 内藤 睦夫

■キャリア教育やアクティブラーニングが必要とされる背景と目指すところ。

少子高齢化、人工知能の進化、グローバル化など何が変わっていくのか予想もできない変化の時代を迎えています。これまでの知識や経験だけでは対応しきれない時代の中で、押しつぶされたり、開き直ったりするのではなく、個と社会の幸せのために明るくたくましく生きていかれる子どもたちを育みたいと思います。

これまでの価値観ややり方を教えるだけでは、そうした子どもたちを育むことはできません。教育に関わる私たち自身が、まず学び、成長し、変化する必要があると感じています。

厳しい時代ですが、新しい価値、生き方を創り出す可能性や喜びがある時代とも言えます。目の前の結果に振り回されることなく、人生100年をイメージした教育のあり方を考える必要があります。キャリア教育もアクティブラーニングもそうした流れの中で大きな意味・使命を持って推進されていると思います。

キャリア教育が目指す「自立」と4つの基礎的汎用的能力。

キャリア教育の定義 一人一人の社会的・職業的自立に向けて、必要な基盤となる能力や態度を育てるを通して、キャリア発達を促す教育
基礎的汎用的能力 1 人間関係形成・社会形成能力 2 自己理解・自己管理能力 3 課題対応能力 4 キャリアプランニング能力

キャリア教育が目指すところは「自立した個」です。そのためにつけたい4つの力が基礎的汎用的能力として示されています。

当初、アクティブラーニングは「主体的、能動的、協働的で、課題解決型の学習」と説明されていました。新学習指導要領では、「アクティブラーニング」という言葉は使われていません。アクティブラーニングという言葉の定義が一般化されていないということなのではないでしょうか。今回の指導要領では「主体的・対話的で深い学びのある学習」と説明されています。

■「変えない」ことと「変える」こと。

アクティブラーニングについて文科省は「これまでのやり方を大きく変えるものではない」「これまでの積み上げの上により質を高めていく」ものであると説明しています。キャリア教育がスタートしたときには「新しいことを始めるわけではない」と説明していました。

キャリア教育とかアクティブラーニングという名前はついていなくても、地道に蓄積されてきた教育実践の中には、実質的なキャリア教育やアクティブラーニングが存在しているのだから、それを位置づけて発展させていこうという姿勢を感じます。

一方で教育現場の「何か新しいことを始めなければならない」という負担感や抵抗感を和らげる効果も狙っているような気がします。

そのため、この説明では何を残し何を变えることが、質的に高めることになるのか、わかりにくいところがあります。

長野県は平成25年に「長野県教員研修体系」を出しました。そこに方向が示されていると思います。

1 長野県教育の理念と教員の使命・任務

【 めざす人間像 】

知・徳・体が調和し、社会的に自立した人間

【 長野県の学校教育の理念 】

子どもの内なる力を伸ばす教育

地域と共に歩む学校

長野県の教育の目指すところは「子どもたちの自立」であり、ベースになるのは、「子どもは限りない可能性を秘めており、常に学びたいという欲求をもつ存在である」という子ども観です。

そんなことは、当然なことだ、昔から信州教育が大切にしてきたことだと言われそうですが、まさにここが「変えない」一番の土台であり、新しい時代を生きる子どもたちを育むために再確認し徹底することだと思います。

今、私たちはこの土台に立ちきっているでしょうか。私たちは、授業、部活、総合の時間、生徒会活動、学年行事など全ての教育の場面で日常的に「自立を支援する」ことを意識しているでしょうか。すべての場面で、「子どものやる気と能力を信じている」でしょうか。

■暴言・体罰はなくなる。

この土台に立ち切っていたら、体罰や暴言はなくなるはずです。

体罰は禁止され、非違行為として処罰の対象になります。だから、体罰は減っているのかも知れませんが、今増えているのは「暴言」だそうです。不適切な言い方で、子どもを否定し、脅すことで支配し変えようとする暴言は、体罰と同質です。

体罰・暴言の生まれる根底に、「子どもは未熟であり、不完全であり、教師が厳しく指導しなければ、間違っただ道へ進んでしまう存在である」という子ども観があると思います。この子ども観が、教師の怒りや激しい叱責を正当化していると思います。

体罰・暴言をなくすために必要なことは、「子どもはやる気も能力もある存在である」という子ども観を腹に据えて、子どもを信頼し尊重することです。「今、そういう存在でないように見えるのは、そうあることを邪魔する何かがあるに違いない」という「児童・生徒理解」に徹する厳しさと温かさのある教師のあり方です。

■「自立させる」が自立を妨げる。

キャリア教育では「自立」をゴールにしています。アクティブラーニングでは「主体的な学び」を大事にしています。この「自立」や「主体的」を語るとき、「自立させる」とか「主体的に学ばせる」という表現が使われることがあります。学習指導案には、「主体的に取り組ませる」「協

力して話し合わせる」「課題に気づかせる」「深く学ばせる」など、「せる」「させる」が次々と出てきます。違和感を感じている人は少ないと思います。指導案はそう表現するものだと当たり前を受け入れています。そして、日常でも無意識に使っています。

この無意識が、「自立」や「主体性」を妨げる落とし穴ではないでしょうか。

「自立させる」と「自立を支援する」は別のものです。「自立させる」という言葉には、「子どもは未熟であり不完全である」という子ども観がベースにあるように感じます。教え、導き、鍛えてやらないと一人前にならないという信じ込みがあるのではないのでしょうか。

わたしたちは「主体的に取り組みたい」「自立したい」という子どもの思いを引き出し勇気づけ、その実現のために寄り添い支援することはできますが、「主体的に学ばせる」ことや「自立させる」ことはできません。それなのに私たちは、教師主導の手立てや誘導、力でそれを成し遂げようとする傾向があります。「課題を持たせる」「グループで話し合わせる」「発表をさせる」という方法を用いて、「アクティブに学ばせよう」「深く学ばせよう」とします。それをアクティブラーニングとするならばアクティブラーニングは新しい教育の質を創り出すことはありません。根底にある子ども観が異なっているのですから、やっていることは同じように見えても別の道を歩いていることになります。その結果、アクティブラーニングは混乱を生み、否定されることになりかねません。

■10年・30年・・・先を見続けること。

「総合的な学習の時間」についても同じことが言えます。「総合的な学習の時間」は、「変化の激しい社会に対応して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることなどをねらいとすることから、思考力・判断力・表現力等が求められ『知識基盤社会』の時代においてますます重要な役割を果たすものである」と説明されています。キャリア教育、アクティブラーニングと背景も目指すところも同じです。

総合的な学習にも「本物」と「総合的な学習のようにみえるもの」の二つがあるのではないのでしょうか。違いを作るのは、やはり子ども観と引き出す力だと思います。「子どもたちをそれとなく誘導し、指示し、主体的に取り組んだようにみせる学習」と「子どものやる気と能力を信じて、活動を支援し続けた学習」は似ているけれど別のものだと言えます。

先輩たちの優れた教育実践を支えてきた「子どもは限りない可能性を秘めており、常に学びたいという欲求をもつ存在である」という子ども観を、揺るがないものとして持ち続けることが「変わらない」ことになります。

そして、この子ども観によらない言動が、教科・総合・学級・部活・生徒指導・行事など日常のすべての場面で行われていないかを見極めて改善すること、自分自身を成長・変化させていくことが「変わる」ことであり、質的に高まることではないのでしょうか。

自分の眼差し・言葉・姿勢・感情は、子どもの自立を支援しようとしているものなのか、それとも子どもをコントロールしようとしているものなのかをメタ認知する力をつけることこそが、本当のキャリア教育・アクティブラーニングにつながると考えます。